

## 礼拝について

これは、金沢聖書バプテスト教会の牧師斉藤秀文先生が、毎週日曜日の週報で、「礼拝」について載せていたものをまとめたものです。

### 礼拝について

- 「真の神を礼拝する（礼拝についてなぜ学ぶか）」
- 「主日について（恵みとしての安息日）」
- 「安息日と新約聖書（上）」
- 「安息日と新約聖書（下）」
- 「神のみに集中」
- 「礼拝って何のこと」
- 「正しい礼拝姿勢とは」
- 「伝道の場としての礼拝」

### 礼拝構成要素 教会音楽

- 「使徒時代の礼拝と前奏」
- 「前奏について」
- 「教会音楽について」
- 「クリスチャンの賛美について1」
- 「クリスチャンの賛美について2」
- 「クリスチャンの賛美について3」
- 「クリスチャンの賛美について4」
- 「会衆賛美は何故ユニゾンが望ましいと考えるか」

### 礼拝の構成要素 招詞

### 礼拝の構成要素 祈祷

- 「祈祷について 1」
- 「祈祷について 2」

### 礼拝構成要素 献金

- 「献金について 1」
- 「献金について 2」
- 「献金について 3」
- 「献金について 4」
- 「献金について 礼拝プログラムの検討」

### 礼拝構成要素 説教

- 「説教について」
- 「説教と会衆」

### 礼拝構成要素 頌栄

### 礼拝構成要素 祝祷

## 礼拝

### 「真の神を礼拝する（礼拝についてなぜ学ぶか）」

私たちが日曜の主日ごとに礼拝を捧げている神は、父・子・御霊という統一性と多様性という栄光によってあらわされる三位一体の神です。私たちが、この神を礼拝するとき、いろいろ明確にしておかなければならないことがあります。それは、私たちが神を真に礼拝する礼拝者となり、キリストの体（教会）として一つとなって神に栄光を帰するためです。更に私たちの礼拝が、恵みを受ける為の手段とするような誤った動機を持って礼拝を捧げないためです。一方自分が、救われた事や日々神の恵みを受けたことの見返りとして礼拝をしてやるといった傲慢な礼拝とならない為に礼拝についての正しい理解と姿勢が必要なのです。

では私たちは、なぜ日曜日毎に教会堂に出向き、一緒に集まって礼拝するのでしょうか。私たちは、日曜日の朝、十字架で苦しまれ死なれた主イエスが復活されたことを知っています。それ故に私たちクリスチャンは、復活の主（死に勝利された方）を礼拝するために日曜日の朝ともに集まり礼拝します。そして私たちが礼拝について、もっと深く、体系的に理解するならば、私たちの礼拝は、更に豊かなものとされるのではないのでしょうか。あなたは、礼拝についてとその具体的な礼拝構成要素について、もっと知りたいと願うのではないのでしょうか。最近、礼拝について多くの本が出てきております。私もこの礼拝について私なりに学んでまとめたものをこれから、お伝えしてまいります。

### 「主日について（恵みとしての安息日）」

私たちは日曜日の朝、イエスの復活を記念して礼拝します。そして礼拝は、私たちの都合で出席できる時にだけ出席すればよいという程度のものであっておりません。まず神さまとの約束である礼拝を優先して考えます。その上で自分の都合や予定を考え、何とかして礼拝を捧げようと努めます。兄弟姉妹方は、決して自分の趣味や楽しみを優先し、時間ができたならば礼拝に出席するという安易な気持ちはないことでしょうか。何故なら礼拝は、一年間に 52～53 回「もある」ではなく「しかない」のですから。この気持ちは、日常生活における個人的な神さまとの交わりにおいて大変大切なのです。

さて、この主日（主の日＝キリスト再臨と区別）についての理解においては、旧約聖書の安息日と深いかわりがあります。安息日についての規定は、旧約聖書のモーセの十戒にあります。この十戒は、出エジプトした後、イスラエルがシナイ山でモーセを通して与えられたものです。これは、十戒がエジプトからの解放（救い）の条件として与えられたのではなく、神に導かれて住む新しい地が異教のはびこる地だからです。この十戒は、この異教の地で民が生きて行く指針として与えられた戒めなのです。つまり今日的に理解するならば、罪の奴隷から解放されたキリスト者が、異教のはびこるこの世を歩む為の大切な指針ということなのです。パウロがように律法は、私たちの罪を示し私たちをキリストにより頼ませ、キリストに導くものです（ガラ 3 章 14～24 節）。

旧約の民は、安息日の丸一日（夕暮れから翌日の夕暮れまで）を時間的にも空間的にも神を礼拝する以外のことはしないと定めて守りました。このユダヤ人たちがとった安息日に対する姿勢は、今日、神を礼拝する私たちキリスト者のあるべき姿を数多く教えています。

また私たちは、この安息日（神の完全な安息の影）がイエス・キリスト（本体）によって成就されたと信じております。そして安息日は、救いの条件ではありませんから、安息日を守らなかったからといって救いを取り去られるわけではありません。しかし、安息日規定の全てが廃止されたわけではありません。ただ祭儀行為規定（宗教行事としての規則）は、（イエスという完全な生贄が捧げられたので）廃止されたのです。しかし更に安息日の規定は、祭儀律法の中で規定されたのではなく、道徳律法としての十戒で定められたの

です。ですから、安息日の規定は全てが廃止されず、道徳律法としての普遍的側面は、キリスト再臨（安息の完全な成就）までなお続く（有効な）のです。安息日において神を礼拝し、神の栄光を現すことの大切さは残っているのです。

### 「安息日と新約聖書（上）」

主ご自身とそして弟子たちは、この安息日を大切にしておりました。主は、安息日の誤用については厳しく叱責されてきました。また弟子たちも安息日には、会堂に入って礼拝を守り、福音を述べ伝えていました。そしてキリスト教会が取りやめたのは、イエスキリストの贖いによって成就したところの祭儀的儀式です。例えば廃止された律法は、安息日ごとの全焼のいけにえや安息日を破った者への死刑等であり、罪のための贖いの動物の犠牲を捧げることでした。しかし弟子たちが、安息日に関して続けて守った事は、

この世の仕事を休むこと

神への礼拝の為に7分の1の時間を主のために用いる（善を行う）日としたことの二点でした。

安息日の重要性については、紙面の都合上十分に論じられませんが、以下タイトルを挙げますので、これをもって一人一人が問い直し、自己吟味して頂きたいのです。

先ず第1は、主日（安息日）を守るということは、（マタイ22章38節）「そこで、イエスは彼に言われた。『心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』これがたいせつな第一の戒めです。」の戒めを具体的に証しすることになります。

第2に、この安息日の戒めは一週間のうちの一日を神礼拝と神の御旨を行う時として取り分ける（聖別する）ことを言います。これは神の民の根本的靈的必要が養われるためです。

第3に、この戒めはその語源の通りに「普段の仕事をやめる」事を意味しています。安息日についての戒めの後にそのあり方と意味が他の戒め比べて詳細に説明されております。ですからこの安息日は（主の安息を言っていますが、私たちの安息とは決して言っていません。私たちにとっては主を礼拝する日なのです）、私たちの休暇の日ではないのです。六日間していることを「ストップ」すること、つまり止める事を意味しております。それは、同時に6日間を十分に働くべき事が勧められているのです。

第4に、この戒めは他の6日間に比べて、特別に安息日の7日目が聖いと言ってはいません。この安息日が他の日に比べて特別に聖であるとの考えは、他の6日間を単なる自分の為のものとして、主の栄光を表す必要は無いとすることです。更にこの日を特別視することは、六日間がクリスチャンを仕事やお金の奴隷であるということを認めることになります。

第6に、この安息も結果的には人のためでもあるということです。礼拝と神の御旨にそって過ごす一日は、魂に真の安息を与えるからです。それは、神と人間のあり方を点検し、靈的に魂を養う日だからです。私たち人間は、神の像に似せて造られました。神を礼拝し、神に従うことこそ人間が、人間として生きているといえる時なのです。人とは、そういう存在なのです。

### 「安息日と新約聖書（下）」

前頁でお伝えしましたが、律法には祭儀律法と道徳律法があります。そしてこの第4戒の中には、儀式（祭儀）律法と道徳律法として更に継続されるべきものがあります。イエスの死によって成就され解放された祭儀律法には、ユダヤ人の安息の年、ヨベルの年、過越しの祭り、贖罪の日、七日目（土曜日）を安息日の日として、この日にあらゆる仕事を

禁じる規定、違反者に対する死という刑罰（出エジプト31章15「六日間は仕事をしてよい。しかし、七日目は、主の聖なる全き休みの安息日である。安息の日に仕事をする者は、だれでも必ず殺されなければならない。」）などがあります。これらは、イエス・キリストによって全て成就され終わりました（ロマ10章4「キリストが律法を終わらせられたので、信じる人はみな義と認められるのです。」）。

しかし道德律法としての安息日に対する普遍的理解について、安息日と新約聖書（上）で5つの原則を上げました。特に次の3者に対する姿勢は重要です。つまり神に対して（対神）、人に対して（対人）、自然に対して（対自）のあり方が戒められています。一言でいうならば神の栄光を表すための勧めなのです。

対神において神の栄光を表すとは、どのような事でしょうか。上山雄治師はその著書「バプテスト初歩教理問答書第一問において私たちにとって一番大切なことは神様のみ栄えを表すことと、いつまでも、神様に信頼する事だと告白しております。そしてこの神様のみ栄を表し、神様に信頼している事を表明するのに最もふさわしい方法が礼拝であり、共に礼拝する主日を重んじる事なのです。

共に礼拝をし、主日を過ごす事が何故相応しいかと言うならば、神が創造の業をなされて七日目に休まれたと言う創世記に基づいているので相応しいといえます。この箇所は、神の創造の業の頂点が七日目である事を私たちに教えます。鞭木由行師はその著書「安息日と礼拝」の中で「創造の頂点は人間の業ではなく、この第七日なのです。それは、神の創造を喜び覚える為、神の創造を永遠の記念として、この日を定められたからです。神は初めからこの日をそのように定められ、それを祝福されました。」と説明しております。確かに私たちが今日的に第四戒を神の重要な道德律法として受け留めるときに大切な理解だと同意するのです。神の創造の業の頂点が第七日目であるとの指摘は、第四戒が私たちを縛るのではなく、神の祝福と喜びの中に招き入れるものだという事が分かります。私たちは、神に向かい、神を慕い求めて生きる者として神の像に創造されたのですから。

### 「神のみに集中」

私たちは、礼拝の祈りの中で、礼拝に出席できなかった兄弟姉妹のことを心に留めて「主よ。今日礼拝に出席できなかった兄姉に私たちと同じ祝福がありますように」と祈ります。一見これは兄弟愛のことばとして美しく、優しい思いやりの言葉に聞こえますが、実は以下の理由で誤りでもあるのです。

1. 人を気遣う余り、私たちが救って下さった神との交わりを後回しにしてしまう誤りです。神礼拝は、神の命令であり、最優先すべきことです。

「あなたは、自分がエジプトの地で奴隷であったこと、そして、あなたの神、主が力強い御手と伸べられた腕とをもって、あなたをそこから連れ出されたことを覚えていなければならない。それゆえ、あなたの神、主は、安息日を守るよう、あなたに命じられたのである。」（申5章15、参照聖句：出31章13～14）との御言葉によれば、安息日の礼拝は、神が（今日的には罪の）奴隷から解放して下さった、主なる神であることを知るために神が定められたものという事が分かります。また私たちは、主を礼拝する事から遠ざかりますと、神の救いがどれほど幸いなことかを忘れて、日々の神の祝福を知ることができなくなりがちです。

2 私たちが、日々神のものとして聖別され続けている事を忘れていているということです。私たちは、キリストの故に神に買い取られた者であり、キリストを信じる信仰に生きる者です。ですから礼拝を捧げる事は、神の御前に自分が何であって何でないかを確認する時なのです。礼拝を通して私たちは、いつも聖別され、神のものとして続けられるのです。従って、私たちは、とりなしの祈りを捧げる事ができても、「同じ恵みを」と

は祈れないのです。礼拝出席は、決して他の人の身代わりとはならないのです。

- 3．礼拝出席できなくても出席者と同じ恵みが与えられるのであれば、あえて 礼拝に出席する必要はなく、そのための準備と祈りは無意味となってしまいます。つまり礼拝が、最も幸いな恵みの場でないことになってしまいます。また、礼拝出席を求める人の祈りや、願いを卑しめてはならないのです。
- 4．またキリストの体として神と交わる時なのです。その時になされる祈りと讃美は、一つ体として捧げる神の恵みに対する感謝の声なのです。これが、公同の礼拝なのです。「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです」(テサ5章16~18節)。この聖書箇所は、実は礼拝への勧めなのです。毎日の祈りと讃美と証の集まった場が礼拝なのです。

### 「礼拝って何のこと」

「よりよい礼拝を捧げるには、」という本に次のように礼拝の本質についてまとめてありました。それを転記させていただき、まとめとします。この本は、米国オレゴン州にありますウエスタン・コンサバティブ・バプテスト神学校の旧約学専攻の教授アレン師と同神学校教会音楽の助教授であるポロ - 師の共著によります。

礼拝とは、神を称賛することです。神を礼拝する時、私たちは神をほめたたえます。神を賞賛し、讃美の声を上げ、神を誇ります。

礼拝とは、オルガンの前奏も打ち消されてしまうような無頓着なおしゃべりのことではありません。音楽という手段によって私たちの心を神の栄光へと調律する為のものとして前奏を考えると、私たちは神をほめ称えているのです。

礼拝とは、まじめに祈りに唱和し、熱心に讃美に加わるとき、私たちは神をほめたたえているのです。

礼拝とは、証を依頼されたときに自分の力を誇示する言葉を用いたり、退屈な決り文句を繰り返すことではありません。神がご自分の民に与えてくださった恵みの故に神の御名を誇るとき、私たちは神をほめたたえているのです。

礼拝とは、礼拝の全ての部分がしっかりと結び合い、共通の目的に向かって働くとき、私たちは神をほめたたえているのです。

礼拝とは、いやいやながら差し出す捧げ物でもなく、また強制されて行う奉仕でもありません。喜んで贈り物を差し出し、真心から仕える時、私たちは神をほめたたえているのです。

礼拝とは、貧弱で計画性の無い音楽ではないし、また演技としてだけ演奏される素晴らしい音楽でもありません。神の栄光の為に音楽を楽しみ音楽に参加するとき、私たちは神をほめ称えているのです。

礼拝とは、散漫な心で説教を耐え忍ぶことではありません。神の言葉に喜んで耳を傾け、説教を通じて自分がますます救い主の姿に似るように求めるとき、私たちは神をほめ称えているのです。

礼拝とは、十分に準備されないままで軽率になされる説教ではありません。聖霊の助けによって、私たちの言葉を用いて神の言葉を崇めるとき、私たちは神をほめ称えているのです。

礼拝とは、主の晩餐を「添え物」であるかのように性急に済ませてしまうことではありません。私たちに代わって死なれ、私たちのために復活され、私たちの幸いの為に再臨されようとしておられるキリストに対する信仰の中心にある、この礼典としての主の晩さんに感謝を持ってあずかる時、私たちは神をほめ称えているのです。(引用箇所 24~26 頁)

### 「正しい礼拝姿勢とは」

礼拝と言う時に、様々な礼拝形式と意識において相違があります。中には、いろいろな集会のはじめの部分に、申し訳程度に讃美とみことばの時間をとることで、礼拝を守っていると考えている人たちがおります。

礼拝は、チョコッと10分か15分で終わり、あとは楽しくゲーム等の余興ではしゃぎ楽しむということがあります。その様な人たちにとって礼拝は、付け足しに過ぎないおです。これが主日礼拝の事ではないにしても、笑って済ますことの出来ない事柄です。私たちの信仰生活の中で、礼拝の意味と重要性和がどれだけ理解され、身近なものとなっているのでしょうか。もしそうなら、礼拝が信仰生活の中で、付け足し程度のものになっているのではないのでしょうか。

また、最近多くなってきたのが、いろいろな楽器を集会の中で、そして礼拝の中で取り入れ、音楽ショーのような「礼拝」です。ピアノ・ベース・ドラム・バイオリン・ギター・トロンボーン・トランペットなどなどの多彩な楽器を使って見事に演出されたショーのような「礼拝」です。私は、様々な楽器を教会の中に取り入れることにおいては、全く異存は無いのですが、礼拝の中に用いるとなると、それが礼拝であるかどうか、はなはだ疑問が沸くのです。確かに、時代と共に、また礼拝者の文化等の違いによって多少とも変えて行くべき事があるかと思いますが、礼拝の本質である「拝む」ということにふさわしいものとは何かを考えたとき、変えてはならないものもあるのではないのでしょうか。

礼拝は、神の臨在としての神の言葉による宣言と支配が基本なのです。それ故礼拝は、人様の好みや気分に合わせて人間礼讃ではなく、神の定められた方法と姿勢で神を礼拝するのです。

### 「伝道の間としての礼拝」

礼拝と伝道は、決して切り離せないものです。礼拝は、伝道でもあります。クリスチャン達の信じているお方を礼拝を通して、紹介しているのです。神に向かうクリスチャン達の姿勢は、おのずと神がどのようなお方を証します。もし、クリスチャンが神を礼拝していると言いながら、隣人との話に夢中になっていたり、居眠りをしていたり、足を組んだり、あちこちらと人ばかり見回しているとするなら、未信者はその様子を見て、クリスチャン達の信じている神とは軽くあしらってよいもの、大切にする必要のない方であり、人が頼るに足りないものであると判断することでしょう。また、神に対していつも不平、不満ばかりをあらわにしている礼拝となるならば、神とは何と物足りない、頼りにならないものだとして判断してしまうでしょう。ですから、礼拝は主を証している伝道の間なのです。私は教会の礼拝は、神礼拝であって、なおかつ伝道であるとの性質を持ったものと考えております。

## 礼拝構成要素 教会音楽

### 「使徒時代の礼拝と前奏」

私たちはクリスチャンが、「礼拝」を考える時、その基本をとりわけ新約聖書に求めます。その新約聖書には、次のような要素があったことがわかります。

使徒たちの教えが語られています。これは聖書朗読と説教といえます。

神への讃美の歌がうたわれていました。旧約聖書の詩篇の朗読や朗誦、いくつかの新しい歌・霊の歌（新約聖書に残されているものがある）。

祈りが捧げられています。旧約聖書の詩篇の祈りが捧げられていたようです。またパウロのように自由な祈りも捧げられていました。

礼典が行われていました。主の晩さんとバプテスマです。それに伴って罪の告白と信仰の告白がなされています。

そのほか、コリント人への手紙には、集会毎の献金、頌栄、祝祷等が行われていたことが記されております。

これらは、今日教会で行われている礼拝の要素とほとんど同じものです。聖書にしるされている神礼拝の姿と姿勢を今日どのように生かしてゆくかが、私たちの課題です。時代や地域によって多少の違いがあることを認めます。

### 「前奏について」

前奏と言われるものは楽器のなかった時代の使徒時代には、今日のような楽器（パイプオルガンであろうとピアノであろうと、また豎琴など）による前奏などと言うものではありませんでした。しかし、中世末期から近世にかけて礼拝用の楽器としてオルガンが完成するに従って、オルガンによる「前奏」が次第になされてきました。

前奏は、もともと礼拝者の心を整えるためのものです。ですから、定刻前から、礼拝開始の5分前とかになったら、司会者の合図を待つまでもなく、オルガニストは前奏をはじめ、定刻にピッタリと終わるように出来るならば素晴らしい準備といえます。そして、定刻に司会者による招きの聖書朗読に移っていきます。時折、もう定刻になって牧師も司会者も礼拝の備えをしているのに、大きな声で会話をしている事があります。礼拝の場に余分なものをおかず、飾り付けがないのは、神に心を集中させる為です。主日教会に集うのは、神を礼拝する為に来るのです。

### 「教会音楽について」

神は、音楽と言う賜物をわたしたちにお与えになりました（第一コリ十四章十五）。そして音楽は、私たちの神への感謝の気持ち、神を喜ぶこと、ほめたたえる事において有効な手段です。しかし同時にサタンも音楽の力と効用性を知っております。サタンは、音楽をもって神をほめ称えるのではなく、自分自身の誉れ、自己陶醉、激しい感情の発露として悪用し、人々の心と意志と知性さえも狂わせてしまいます。ですから私たちは、礼拝での音楽の位置を正しく知っておかなければなりません。

まず大切な点は、聖書の音楽の基本基準がその機能性あるということです。音楽は、真理の侍女の立場です。「故に音楽は、本質的な存在ではない。そしてリズム、ハーモニー、メロディーは、音楽と言う一つの手段の全要素です。手段としての音楽は、それ自身に注意を向けさせても、真理を傷つけてもいけません。もしそうならば、それは悪い音楽と言わなければなりません。音楽は僕であり、手段です。それ故、礼拝音楽においては、「それは楽しいか」「それは品位があるか」「音楽的に洗練されているか」とかが第一義的課題（欲求）にはなりません。基準は、一言で言えば「それは効果的か」です。礼拝における音

樂の目的は、真理の強化にあります。どのような形式の音楽伴奏が用いられるにせよ、第一義的に美学的質の問題としてではなく、何にも勝って倫理的質の問題として評価され強調されるべきです。無論これは、美学的に悪い、あるいは凡庸な音楽に留まれということではありません。いかなる人間活動においても、貧弱な標準こそが神に栄光を帰するという考えはありません。問題にしている事は、正しい優先性についてです。讃美での伴奏が、ことばの真理を人に届かせるのにどれほどの有効性を持つかが重要だという事です。

以上から、私たちの礼拝音楽の伝統的形式をむしろ注意深く再検討しなければならないのです。もし私たちの礼拝が、適切な礼拝音楽と言う観点から見て不適切かどうか、その時、前奏、間奏、会衆讃美、後奏はどうか、明確にし理解しておく必要があります。礼拝自身が、悪しきものになってしまわないためにです。

### 「クリスチャンの賛美について1」

クリスチャンの讃美とは、神を褒め称え、神の御名が崇める為に音楽を持って証することを言います。詩篇の作者は、「御名の栄光をほめ歌い、神への賛美を栄光に輝かせよ。神に申し上げよ。『あなたのみわざは、なんと恐ろしいことでしょう。偉大な御力のために、あなたの敵は、御前にへつらい服します。全地はあなたを伏し拝み、あなたにほめ歌を歌います。あなたの御名をほめ歌います。』」(66篇2~4節)と歌っています。ここから判りますように、まず第1に大切な事は、讃美とは、ただひたすら「神をほめたたえる」ことだという事です。それは神に向かったの奉仕であり、礼拝行為となります。

第2に大切な事は、賛美は信仰を公に、そしてあらゆるところで(現実生活の中において)表明する行為だという事です。詩40篇3節「主は、私の口に、新しい歌、われらの神への賛美を授けられた。多くの者は見、そして恐れ、主に信頼しよう。」人々に神を証するという事です。

またこの讃美が証であるという事は、使徒の働き16章にあります。パウロとシラスが、牢獄で讃美した出来事はそのよき例です。それが会衆賛美であろうと聖歌隊の賛美であろうと、キリストの神性とキリストの十字架の贖いによって示されている神の慈愛を証しし、悔い改めを迫るものです。

第3に、賛美は霊によって教会が一致して祈る祈りです。詩篇42篇2節「私のたましいは、神を、生ける神を求めて渴いています。いつ、私は行って、神の御前に出ましようか。」ダビデは、多くの詩篇を書きました。それは、神への祈願でした。他の詩篇の作者の詩も同様に神への祈りでした。そしてその詩を豎琴やタンバリン、笛等を持って聖歌隊に歌わせております。またこの祈りを通して、神の民は、心を一つにしております。コロサイ3章16節[キリストのことばを、あなたがたのうちに豊かに住ませ、知恵を尽くして互いに教え、互いに戒め、詩と賛美と霊の歌とにより、感謝にあふれて心から神に向かって歌いなさい。]

これらからいえることは、賛美はあくまでも神に向かうものだという事です。自分自身を喜ばせ、人をほめたたえるものではありません。ですから自己陶醉型の賛美は、厳に避けなければなりません。

### 「クリスチャンの賛美について2」

先項で、礼拝論の中の会衆賛美について学びました。それを前提にして、具体的に会衆賛美における「心得」についての勧めをします。

- 1、 会衆がこころがけたいこと
  - (1) 良い姿勢で、はっきりと

歌集を持ってみながら歌うと、どうしても姿勢が悪くなりがちです。当然、楽に声を出すことは出来ません。背筋をピンと伸ばした良い姿勢をとるために歌集をできるかぎりに上にあげ、顔をあげる事ができるようにしましょう。その姿勢で口をはっきりとあけて端正（容姿や動作、振る舞いが、キチンとしている様）に歌うようにしましょう。また、呼吸法も意識するようにしたいものです。たっぷりと息を吸い、腹にまだ息が残っているうちに、ゆとりをもって息継ぎするように心がけて歌うと良い賛美となります。普通会話をする場合は肺活量の3割程度、スピーチでは6割程度(説教者は、6割から7割)ですが、歌を歌うときには8割程度といわれています。賛美は献げものですから、律儀(礼儀や正しい道理を堅く守ること)に、心を込めて差し出す思いは、まず態度に表れます。

## (2) 歌詞を味わいながら

賛美は、歌をもって献げる神への霊的な供え物です。会衆が共に賛美することによって、内面的な一致が図られるものです。歌詞の意味をよく理解して、味わいながら歌うようにしたいものです。曲が予め判っているのですから、一度目を通しておく備えは、心からの礼拝賛美を献げるのに役に立つ事でしょう。そのためには、いつもよりも早く教会堂に集い、椅子に座って静まり、礼拝に備えるという具体的な備えが必要となります。これは、何かと忙しいスケジュールの中で困難を覚えるかもしれませんが、最も優先されるべき備えです。

### 「クリスチャンの賛美について3」

神殿で賛美を献げたユダヤの民の姿(歴代29章16~21節)から、賛美を献げるときの大切な心構え、姿勢、内容、意味などについて学びます。

1、まず神を礼拝し賛美する前に神殿をきよめた。「祭司たちが主の宮の中にはいって、これをきよめ、主の本堂にあった汚れたものをみな、主の宮の庭に出すと、レビ人が受け取って外に持ち出し、キデロン川へ持って行った。…アハズ王が、その治世に、不信の罪を犯して取り除いたすべての器具を整えて、聖別しました。ご覧ください。それらは主の祭壇の前にあります。」私たちは、聖霊なる神を心の内にお迎えしている神殿です。その私たちが献げる時にまず大切なことは、異教的な宗教的習慣や信仰の捕え方をきよめることから始まります。

2、いけにえが献げられた。いけにえの順序は次のようなものでした。

民の為のいけにえ(悔い改め、贖罪)「彼らは、王国と聖所とユダのための、罪のためのいけにえとして…」全焼のいけにえ(献身)「全焼のいけにえをささげ始めた…ヒゼキヤは言った。『今、あなたがたは主に身をささげました。』」

感謝のいけにえ(和解)「そこで集団は感謝のいけにえを携えて来た。心から進んでささげる者がみな、全焼のいけにえを携えて来た。」この悔い改め、献身、和解、という順序は決して変えることのできなものです。そして現代の教会の礼拝プログラムも、基本的にはこの順序に従っています。

3、主のご命令としての賛美 預言者たちは民に賛美することを命じられたが、この命令は主からであった。私たちはみな、賛美することを主から命じられている事を心に留めたい。そしてその命令には秩序がありました。誰一人として勝手に、自由に賛美している者はいない。まず、異教的な習慣や異教によって汚されたものをまずきよめるのです。私たちは、神を賛美することにおいて、異教的な要素や人間的情に訴えるヒューマニズム的要素を取り入れてはなりません。自分たちが神を賛美しようとする心において、詩や曲において、また賛美方法において、十分に聖別されたものであるかどうかを

点検しましょう。

#### 「クリスチャンの賛美について4」

信仰者はどのように賛美すべきでしょうか。聖書が教えているところを「礼拝賛美のころえ」天田繁著より参照しつつ学びましょう。

##### 1、互いに、一つとなって

エペソ5章18から19節でパウロは、次のように勧めます。「また、酒に酔ってはいけません。そこには放蕩があるからです。御霊に満たされなさい。詩と賛美と霊の歌とをもって、互いに語り、主に向かって、心から歌い、また賛美しなさい」と。

まずパウロは、「酒に酔ってはいけません」と勧めます。何故なら、「そこには放蕩があるから」です。ですから、酒に酔っていないなくても、放蕩をしないことが勧められているのです。放蕩とは、身をわきまえない状態になること、反逆する生活や秩序のない態度、放蕩三昧な状態などを言います。つまり無秩序なことや、見苦しい、いやらしい態度のことを指しています。そのような状態から離れるためには、お酒によって醜態をさらさない為に、「御霊に満たされなさい」と勧めます。そうして「互いに語り」、「主に向かって、心から歌い、また賛美しなさい」と勧めます。

御霊に満たされると言うことは、放蕩に陥ることとはまったく無関係なことです。御霊に満たされると言うって、酒に酔ったときと同じように度を越した状態(異常な興奮状態や、無自覚的な賛美)になって賛美したとしたならば、それは御霊に満たされる事とは異なります。何故ならば、「詩と賛美と霊の歌とをもって、互いに語り」と勧められているからです。つまり歌詞を持って互いに語るということです。まず音楽があるのではなく、歌詞を持って、それを私たちの信仰告白として語り合うということです。それから「主に向かって」歌うことが勧められているのです。自分自身の心の満足や充足感と言った自己満足ではなく、はっきりと誰を褒め称え感謝しているのか、何を感謝しているのかを自覚するということです。何故なら、先にも言いましたが、賛美は、信仰告白でもあるからです。何をどのように信じているのかを証しするものとなるのです。

そのように何をどのように信じ、誰に向かって信じているのかが分からなければ一致することはできません。互いに一つとなれません。

今は、「一つとされる為に」賛美がなされる事についてです。パウロは、次のように言っています。「キリストのことばを、あなたがたのうちに豊かに住ませ、知恵を尽くして互いに教え、互いに戒め、詩と賛美と霊の歌とにより、感謝にあふれて心から神に向かって歌いなさい」(コロサイ人への手紙3章16節)

この箇所では、みことばを「キリストのことばを…互いに教え」「互いに戒め」「詩と賛美と霊の歌とに」よって「感謝にあふれて心から神に向かって」「歌いなさい」と勧められております。つまり、御言葉を互いに育て合い、成長していく中で、一つとされる為に歌いなさい、というのです。

また、第2歴代誌5章13節にはこうあります。「ラッパを吹き鳴らす者、歌うたいたちが、まるでひとりででもあるかのように一致して歌声を響かせ、主を賛美し、ほめたたえた。そして、ラッパとシンバルとさまざまな楽器をかなでて声をあげ、『主はまことにいつくしみ深い。その恵みはとこしえまで。』と主に向かって賛美した。そのとき、その宮、すなわち主の宮は雲で満ちた。」これは、ソロモンによって神殿が完成したときの出来事である。興味深いのは、ここには大勢の人がいたにもかかわらず、「まるでひとりででもあるかのように」、つまり斉唱でうたったという事である。で歌ったという事である。これは皆が一つになったという事を象徴しており、その結果、神はそれを喜ばれ、雲を満たして神殿を祝されたのです。

この聖句より、礼拝賛美の会衆賛美が、斉唱が良いとする考え方があります。そのほかいろいろな説がありますが、ここでは、靈的に一つになった事が結果として、いわば音楽上、斉唱になったと見ていいだろう。賛美のルーツは、あくまでも斉唱になったと見ていいだろう。賛美のルーツは、あくまでも斉唱であった。それは、会衆が一つとなるためのものだからである。

### 「会衆賛美は何故ユニゾンが望ましいと考えるか」

私たちの教会では、礼拝は、人間中心ではなく、神のみを中心とした人間の行為だと考えております。礼拝とは、神を最高に価値あるとする具体的人間の行為です。ですから、私たちの献げる礼拝が、神を喜び、神の栄光をあらわす以外のいかなる人間的欲求をも満足させる為の礼拝とならないことを願うのです。

上山雄治師が、著書「初歩バプテスト教理問答書」第1問の問答において記しております。「私たち(人間)にとって一番大切なことは、神だけの御栄を表す事と、いつまでも神様に信頼することです」と教えております。この教えは、決して新しいものではありません。宗教改革者たち、バプテストたちもまた「第1問、人の主な目的は何か。答 人の主な目的は、神の栄光をあらわすことと、永遠に神を喜ぶことである。」【バプテスト教理問答書(一六九三年)】と教えています。これを目的とすることが、神の前におけるあるべき人の姿だということです。何故なら、人間はその様に造られたからだ、と上山師は第二問で説きます。私たちは、自分を楽ませる為、自分の欲望を満たす事によって喜ぶのではなく、神の栄光があらわされることを喜び、また神ご自身を喜ぶのです(一コリ十章三一節、詩篇七三篇二五~二六節、エペソ二章十節)。

そして礼拝は、人からではなく、神から与えられるものですから、美麗美句に満ちた祈りのことばや荘厳な儀式、美しい音楽(賛美や演奏)によって、会衆を陶醉させ、それで満足させる場としたり時としたり、してはならないと考えます。

旧約聖書の人々は、神を礼拝する場合に、神の教えられた方法(祭儀律法)に従って、それぞれが最高の犠牲を携え、神を最高に価値あるものとして礼拝しました。彼らは、自分勝手な適当な方法で礼拝を献げていたわけではありませんでした。またそれは、単に動物の犠牲だけが献げられていたわけではありません。礼拝者は、悔いし砕けた心をもって犠牲を献げたのです(詩篇五一篇十六、十七節)。これこそが、神に喜ばれる礼拝です。

かくして礼拝とは、神が私たちに何をしていただけかではなく、神に対して献げられた礼拝を、神が受け入れてくださるかどうかが、一番の中心課題なのです。そして受け入れてくださった事を心から喜ぶのが、礼拝者の喜びなのです。私たちには、この点で望みがあります。何故なら私たちは、神の子羊キリストが犠牲となってくださった贖罪の血をもって、神の御前に礼拝を献げるからです。決して私たちの心の満足度によって神に私たちの礼拝が受け入れられたかどうかをはかるべきではありません。キリストの贖いにより頼んで、キリストを信頼しているかどうかなのです。

私たちは、最も偉大な犠牲を携えて、神の御前に入る事が許され、神を賛美し、その御言葉の前に平伏し、主をあがめることができるのです。私たちは、罪の習慣にまだまだ縛られている罪人で、弱い者です。ですから私たちは、神を中心にする礼拝において、信仰を働かせ、細心の注意を払わなければなりません。その様に心がけなければ礼拝は、人に向かうもの、または自己満足な礼拝となってしまいう危険性が十分にあります。私がこのように述べるのは、何とかして私たちの合同の礼拝では、神の栄光だけが賛美され、神だけを喜ぶものでありたいという祈りがあるからです。

このような点から、合同礼拝における賛美はどうあるべきかを考えてゆくとき、現在の教会の賛美スタイルになったのです。

私が、礼拝における会衆賛美を大切にするのは、何とかして私たちの合同礼拝が、神の栄光を讃美し、神だけを喜ぶものでありたいという祈りがあるからです（コロサイ三章十六節「キリストのことばを、あなたがたのうちに豊かに住ませ、知恵を尽くして互いに教え、互いに戒め、詩と賛美と霊の歌とにより、感謝にあふれて心から神に向かって歌いなさい」。この言葉は、御言葉をもって互いに成長しあうと同時に、一つとされる為に歌いなさいと勧めているのです。

また合同の礼拝は、一人一人が各身体の器官として一堂に集まり、互いに一つとなって献げられるものでありたいのです（エペソ五章十九節「詩と賛美と霊の歌とをもって、互いに語り、主に向かって、心から歌い、また賛美しなさい」）。ここに讃美とは、何を言っているのかわからない、どのような気持ちを表しているのかわからないものではなく、詩をもって、はっきりとその内容が告白されているものであると教えているのです。

このような御言葉から、合同礼拝においての賛美として斉唱がふさわしいと考えるのです。具体的には、次の理由からです。

まず第一は、第二歴代誌五章十三節において、ユニゾンで歌われたとき、神の栄光がその神殿をおおったとあります、旧約聖書の例に習うからです。

「ラッパを吹き鳴らす者、歌うたいたちが、まるでひとりでもあるかのように一致して歌声を響かせ、主を賛美し、ほめたたえた。そして、ラッパとシンバルとさまざまな楽器をかなでて声をあげ、「主はまことにいつくしみ深い。その恵みはとこしえまで。」と主に向かって賛美した。そのとき、その宮、すなわち主の宮は雲で満ちた。祭司たちは、その雲にさえぎられ、そこに立って仕えることができなかつた。主の栄光が神の宮に満ちたからである。」

神殿での礼拝讃美は、霊的に一つになった結果として斉唱になったのです。それは、「まるでひとりでもあるかのように一致して歌声を響かせ」と言うのです。このように合同礼拝の讃美のルーツは、あくまでも斉唱であったようです。天田繁師は、その著書「礼拝賛美のこころえ」の中で斉唱にする意味として「それは、会衆が一つとなるためのものだから」と指摘します。

第二に、賛美は神に向かって献げるものです。礼拝において、私たちの心を神から他に向かわせてしまう危険性のあるものを持ち込まないようにしなければなりません。礼拝における会衆讃美は、人に聞かせて、人の気を引く為のものではありません。また、自分は歌がうまくないと言って人の耳を気にするものでもありません。もしこのような、人間の罪からくる弱さが十分に配慮されないならば、歌のうまい人ばかりが目立ち、そうでない人は、心からの讃美を献げられなくなります。会衆にこのような距離感が生まれてしまつては、一つからだとなって、神に向かえなくなつてしまいます。これでは、形の上では礼拝をしているつもりでも、実際には礼拝をしていない事にならないでしょうか。皆が讃美できて、共に心からの礼拝を献げれる事を目指す礼拝でありたいのです。

第三に、礼拝は、いろいろな人が参加でき、神の御前に大胆に出る事ができる為です。讃美には、必ず信仰の告白がなされています。そしていつも出席している会衆は、ある程度讃美歌を知っておりますが、初めて礼拝に出席された方たちは、初めての讃美歌を歌う時、戸惑う場合がほとんどです。その時に会衆讃美がそれぞれのパートを歌っていますと多くの混乱を引き起こします。また同時に、礼拝に対して多くの戸惑いを引き起こしかねません。

ある人たちは、「合唱における一致と言うのも一致ではないだろうか。」と言われます。しかし、合唱と言う時（専門家でもなく、実際合唱のグループに参加したこともない者が、このように言うのはおこがましいのですが）、他のパートの声を聞いて自分のパートの音程をとるのでなければ、音楽的調和と言う一致は、得られないのではないのでしょうか。その意味で、心は他のパートに向かわざるを得ません。それが、どんなに素晴らしいハーモニーだったとしても、それは自己満足であつて、神のその時は、御前に心はない事になるでしょう。

## 礼拝の構成要素 招詞

礼拝は、神によって招かれて始まります。礼拝は、礼拝に招く神の言葉で始まります。礼拝への招きと言うのは、神がその民と交わり、祝福しようとして、整えて待っていて下さるということを感じる為になされます。ですから礼拝とは、私たちの自発性から発するのではなく、主からの招きによって成り立つのです。

また礼拝は、私たちが恵まれたと感じることよりも、更に大切なことは神への感謝と賛美であると言う視点が大切です。この視点がぼやけてくると、礼拝と一般的な集りとの区別がなくなってしまいます。旧約では、「祭壇を築いた」と言う言葉で礼拝を表しました。ここでは礼拝が、神への感謝と讃美と和解であると言う事柄が明確にされます。

礼拝全体は、神の恵みの言葉が先行し、それに礼拝者の信仰の告白と服従をもって応答することで成り立ちます。その意味で「招きの言葉」は、始まりの合図ではなく、礼拝を成立させる最も大切な要素です。礼拝への招きの言葉を全員で聴くことによって、礼拝を初めから終わりまで真剣に守る霊性を整えます。この招きの言葉（招詞）の朗読を通して、礼拝の基本的な性格が、神への感謝と賛美であると言うことを極めて端的に示されているのです。

また礼拝の主導権は、神の第一声で初められる事によって、神であることを自覚させられ、人は祈りや讃美でこれに応答してゆくのです。奏楽が終って、招きの言葉（招詞）へと礼拝が進んでゆきます。

招きの言葉を会衆は、神の言葉を聞くのですから、起立して聞くのが自然であるとする教会もあります。いずれにしても大いなる恵み深い神への感謝と讃美へと招く言葉です。

朝の礼拝においては、神の招きの言葉で始まり、讃美と罪の告白をもって応え、聖書朗読と献身の証としての献金、そして説教によって神の言葉を聴き、感謝と頌栄、祝祷を持って終わります。

## 礼拝の構成要素 祈禱

### 「祈禱について 1」

「この人たちは、婦人たちやイエスの母マリヤ、およびイエスの兄弟たちとともに、みな心を合わせ、祈りに専念していた。」(使徒1章14節)

「そして、彼らは使徒たちの教えを堅く守り、交わりをし、パンを裂き、祈りをしていた。」(使徒2章42節)

これら2箇所(の聖句)から、教会は祈りの中から生まれ、祈りによって成長・発展していった事。そして、みことばの勧めと交わりの中でなされる「パンを裂き」によって、教会とはキリストの贖いを共に受けているが故に心一つにして祈り、キリストのからだを構成している各器官が、一つであるべきことを自覚させます。これが、共に祈る大きな動機であり、意味です。またここでの祈りは、個人的な祈りではなく、教会として祈る公の祈りでした。皆が共に集まる礼拝における祈りとは、「礼拝」そのものであり、礼拝は祈りであるといわれる理由です。

今日の教会の弱さ(各キリスト者の信仰の弱さ)は、何かしないこと、してあげないこと、出来ないこと、能力のある人材が無いことではなく、共に祈ること、つまり初代教会のように祈りに専念する姿が教会から消えている事によります。更になされる祈りが、個人的問題解決や必要の為にのみ祈ると言う祈りしかしないという事です。祈りが、自分の欲求の満たしを願う個人主義(他者の必要のためにとりなしをしない)的信仰の場となっていることは教会の今日的課題です。

以上から祈りについて大切な二つの前提を見ることが出来ます。

第一は、礼拝の中における祈禱は、それ自体が礼拝の中で欠かすことの出来ない大切な構成要素だということです。教会は祈りの中で生まれたのです。

第二は、主が教えられた主の祈り自体が、教会で共に祈る祈りであったということです。主は、「天にいます私たちの主よ。」と複数形で呼びかけるように教えています。つまり、単数ではなく集団の祈りを教えています。祈りは、教会と言う共同体を離れたところではありえないのです。祈禱は、礼拝に欠かすことのできない大切な要素なのです。

### 「祈禱について 2」

礼拝時での祈りが、個人的祈りではなく共同の祈りであると言う点を自覚する事はとても大切な事です。これは、教会がクリスチャンの共通の問題、課題を持って祈るからです。礼拝における祈りは、宣教の働き、教会財政等々、様々な教会行事、礼拝の祝福、説教と説教者の霊性等のための祈りです。又国家や為政者、世界の貧困者、環境の問題、戦争や飢餓の人たちについての祈りも礼拝に相応しい共同の祈りです。

また祈りは、神に向かうものですから、会衆に向かって教え諭すものではないし、個人的な祈りでも、自己主張の場ではない事はいうまでもありません。祈禱者は、会衆全体の代表として、会衆によって構成されている教会として、神を崇める祈りをささげます。又、礼拝における祈りは感謝の祈りでもあります。感謝の祈りは、神の栄光を現す祈りとなります。私たちクリスチャンは、この礼拝に集い、共に祈ることによって、神の御前で個人的な必要の満たしばかりの偏った祈り(独善的な願望)しかできない人や日常生活の中で祈りの少なかった人たちが、この礼拝において、普遍的で正しい祈りへと矯正され、導かれるのです。

以上のことから公同の祈りには、次の8つの要素が含まれている事が望ましいといえます。

神にのみ栄光を帰する事。 教会の必要を願い求める事。 悔い改めること。  
感謝すること。 自分の霊性の成長のための必要が求められている事(嘆願)。

「とりなし」がなされる事。 証しがふくまれていること。

献身の決意がなされている事。

これらは、聖霊なる神によって御言葉が、日常のクリスチャン生活において実を結ぶことを祈る祈りです。キリスト者の集まりとしての教会の証は、礼拝の祈りにおいて最も豊かになされます。

## 礼拝構成要素 献金

### 「献金について 1」

私たちは、祈りにおいて「献身」の祈りが大切ですが、この献身は、共同の礼拝における献金(什一献金とは異なる)という礼拝行為においても告白いたします。ある人たちは、献金というお金に関する行為を「やっぱりお金儲けか」という誤解を避ける為に礼拝に相応しくないと考えておられるかもしれませんが。そのような方々は、お金のことを言うのは汚い、世俗的であるとの思いが強く献金の意味が分からないからです。しかし、神の御言葉が説かれ、罪の赦しによって神の愛、キリストの恵み、聖霊の交わりを頂いたことによって感謝を持って応答するのがキリスト者の行動原理なのです。ですから献金は、自己犠牲の伴った最高の礼拝行為といえるのです。

パウロは、「兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。」(ロマ 12 章 1 節)といって神に対して、救いの感謝の応答として献身を勧めています。それ故に礼拝は、新たに自分を神に献げる行為といえます。そして主イエスは、エルサレムの神殿で献金について弟子たちに教えられました。金持ちたちは、大金を献げました。しかしイエスの関心は、別なところにありました。それは、レプタ二枚(大変少ない金額である)を献げた貧しいやもめでした。「わたしは真実をあなたがたに告げます。この貧しいやもめは、どの人よりもたくさん投げ入れました。みなは、あり余る中から献金を投げ入れたのに、この女は、乏しい中から、持っていた生活費の全部を投げ入れたからです。」(ルカ 21 章 3~4 節)と言われ、その献金が彼女の全てであることを知っておられます。彼女は、全てを主に委ねました。主は、その信仰(献身)を誉められたのでした。このことから献金は決して金額ではないことが教えられます。神の側で払われた犠牲(御子のなだめの供え物としての十字架)に代えて、私たちが献げる献金こそが礼拝行為の頂点と言わざるをえません。ですから私たちの礼拝が祝福されるのは、自らを神に献げる(委ねる)信仰による時です。

### 「献金について 2」

献身は、共同の礼拝において自己犠牲の伴った最高の礼拝行為です(ロマ 12 章 1)。神がくださった救いに対する感謝の応答としての献身です。その告白としての献金があります。

ルカ 21 章 3~4 節より献金は、決して金額ではないことがわかります。私たちの礼拝が祝福されるのは、自らを神に献げる(委ねる)信仰による時だけです。

そして礼拝時における献金もただ献げさえすればよいというわけではありません。献金が金額の多少に価値をおかないとするならば、その献げる時の姿勢が重要となります。確かに献身の思いで献げるのですが、それだけではありません。

まず献金は、神こそ全ての所有者であられ、私たちはその管理者に過ぎないという自覚が大切なのです。ですから、献金は、自分の生活のどうでも良い付属物を献げるのではなく、神のものを神にお返しするという謙虚な姿勢が必要なのです。これは、献金が財布の中に残った小銭を処理して財布を軽くする為の機会ではないということです。全生活の中心、また基礎に置くべきだということです。

また私たちは、献金を人の姿をみて「自分ばかりがお金を出している」「あの人は献金している、いない」「金額が大きい小さいか」と比較をしてはならないということです。更に、自分の為に浪費をするだけして、残金を献金するという献金の仕方も礼拝献金としては相応しくありません。神と自分との関係で真剣に取り組みたいものです。確かに献金には犠牲が伴います。しかし、神はその一人子を犠牲にされたのです。私たちの救いも礼拝

もここから出発しています。この神の払われた犠牲に対してわたしたちの献げる礼拝があるのです。当然この神の犠牲に対しての応答としての献金も犠牲が伴います。否むしろ痛みの伴わない献金はないはずです。これが献金なのです。

### 「献金について 3」

献身は、合同礼拝において自己犠牲の伴った大切な礼拝姿勢です。(ロマ 12 章 1)。それ故、神がくださった救いに対する感謝の応答として献身を表す献金も大切な礼拝行為です。ですからあくまでも神に向かうものであって、人と比較して金額を決めたり、優劣を競ったりする献金は、主の前に献げたことにはなりません。各自が示されたところを、全てを知られる主に奉げましょう(マタイ 6 章 3~4、6)。また当然痛みの伴わない献金はありません。ですから人にも分ってもらいたいという誘惑があることでしょう。しかし主は、その痛みも犠牲も知ってくださっております。これが、献金なのです。

さて次に献金の具体的な用途について理解していることが必要です。神が、神の国を拡大する時、金銭を用いなくても福音を前進させることの出来るお方です。しかし、神の国の拡大(福音の更なる前進)を人間の榮譽ある仕事として、人間がその働きに携わることを許し、委ねられました。それ故、福音宣教は教会の事業であり、人間の事業といえます。人を救うのは、神の一方的な恵みであり、神の業ですが、宣教の任務は神が人に与えられている人の事業です。教会に委ねられている宣教活動が人の事業である限り、教会はお金を必要とします。多くの教会は、神が礼拝行為の一つである献金に参加することをよしとされていると告白し、献金を用いてきました。私たちは、その奉げられた献金を持って海外や国内における福音宣教に携わる伝道者の働きを助け、支えます。宣教が人の活躍すべき事業であるならば、そこで御言葉のために専心働く宣教者たちは、当然、教会によって経済生活を省みられるべきです。救いを得ているキリスト者は、この恵みを覚えて献金をおろそかに考えてはなりません。

パウロは、コリントの教会からはその献げ物を受けませんでした(コリント 9 章 3~15)。それは、その教会の献げ物はパウロが受けるに値しない献げ物だったのです。しかしピリピの教会からの支援は喜んで、感謝して受けたのです。それは、彼らの献げ物が受けるに相応しく奉げられていたからです。それ故、献金はクリスチャンの特権であり、クリスチャンは献金できることを誇りとするべきです。献金は、全てのクリスチャンが宣教命令に具体的に参加することであり神への捧げものとなるのです(ピリピ四章十八節)。

### 「献金について 4」

礼拝行為としての献金についてその意味や姿勢について学んできました。教会の財政は、その他に十分の一献金・感謝献金・指定献金等で充たされていきます。その経過や結果報告等は教会によって選出された教会会計担当によって管理、報告されます。クリスチャンの信仰と恵みへの感謝の献金のみによります。

金沢聖書バプテスト教会は、次のような信仰告白をしております。

#### 17条 奉げる恵みについて(教会の信仰告白文より)

「私たちはこう信じる。献金は、神から与えられた恵みであり、信仰の基礎の一つである。十分の一の献金については、それは律法が与えられるより四〇〇年も前に行われていた定めである。またこれは律法の中にも組み入れられ、主イエスもこれを保証された。これは、教会の会計へ携えるようにと定められている。」

参照聖句： コリント 8 章 7 節「あなたがたは、すべてのことに、すなわち、信仰にも、ことばにも、知識にも、あらゆる熱心にも、私たちから出てあなたがたの間にある愛にも富んでいるように、この恵みのわざにも富むようになってください。」 コリント 16 章 2 節「私がそちらに行ってから献金を集めるようなことがないように、あなたがたはおのこの、いつも週の初めの日に、収入に応じて、手もとにそれをたくわえておきなさい。」、ヘブル 7 章 2 節「またアブラハムは彼に、すべての戦利品の十分の一を分けました。まず彼は、その名を訳すと義の王であり、次に、サレムの王、すなわち平和の王です。」、マタイ 23 章 23 節「忌わしいものだ。偽善の律法学者、パリサイ人たち。あなたがたは、はっか、いのんど、クミンなどの十分の一を納めているが、律法の中ではるかに重要なもの、すなわち正義もあわれみも誠実もおろそかにしているのです。これこそしなければならぬことです。ただし、他のほうもおろそかにしてはいけません。」、レビ 27 章 30 節「こうして地の十分の一は、地の産物であっても、木の実であっても、みな主のものである。それは主の聖なるものである。」、マラキ 3 章 9 節「あなたがたはのろいを受けている。あなたがたは、わたしのものを盗んでいる。この民全体が盗んでいる。十分の一をことごとく、宝物倉に携えて来て、わたしの家の食物とせよ。こうしてわたしをためしてみよ。」

そのほかの聖句：使徒 4 章 34~37 節

#### 「献金について 礼拝プログラムの検討」

多くのプロテスタント教会が行っております礼拝時における（献身を告白する）献金を取り入れることについて、検討することを願っております。このとき私たちは、献金する金額について戸惑ったり、心配したりする必要はありません。献金は、金額の多少が大切なのではなく、自分の身を神にささげるといふ献身を告白する行為なのです。ですから、毎週自分で準備し、神様の前で決めた額をささげて告白とします。子供は、10 円かもしれません。それも大人の献金と同じ価値を持つささげ物なのです。

主イエスは、エルサレムの神殿で献金について弟子たちに教えられました。金持ちたちは、大金を献げました。しかしイエスの関心は、別なところにありました。それは、レプタ二枚(大変少ない金額)を献げた貧しいやもめでした。「わたしは真実をあなたがたに告げます。この貧しいやもめは、どの人よりもたくさん投げ入れました。みなは、あり余る中から献金を投げ入れたのに、この女は、乏しい中から、持っていた生活費の全部を投げ入れたからです。」(ルカ 21 章 3~4 節)と言われ、その献金が彼女の全てであることを知っておられたのです。

またパウロは、「兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。」(ロマ 12 章 1 節)といって神に対して、救いの感謝の応答として献身を勧めています。それ故に礼拝は、新たに自分を神に献げる行為といえます。

私たちは、この献身を共同の礼拝における献金(什一献金とは異なる)という礼拝行為においても告白いたします。ある人たちは、献金というお金に関する行為を「やっぱりお金儲けか」という誤解を避ける為に礼拝に相応しくないと感じておられるかもしれません。献金の事が十分に理解されないとお金のことを言うのは汚い、世俗的であるとの思いが強く、献金の意味が分からなくなります。しかし私たちの献金行為は、神の御言葉が説かれ、罪の赦しが与えられ、キリストの恵み、聖霊の交わりを頂いた感謝を表すキリスト者の礼拝行為が原理です。ですから献金は、自己犠牲の伴った最高の礼拝行為といえるのです。

彼女は、全て主にお委ねした。主は、その信仰(献身)を誉められたのでした。このことから献金は決して金額ではないことが教えられます。神の側で払われた犠牲(御子のな

だめの供え物としての十字架) に応えて、私たちが献げる献金こそが礼拝行為の頂点と言わざるをえません。ですから私たちの礼拝が祝福されるのは、自らを神に献げる(委ねる) 信仰によるときです。

## 礼拝構成要素 説教

### 「説教について」

#### a. 会衆のあり方

キリスト教の説教とは、人の救いの為に神が定められたもので、それを公に宣言する人の言葉です。したがって説教に携わる者は、神のお言葉を語るのですから語ることばにおいて、態度において、神を証しするという慎重な態度が求められます。そして神の言葉を語るのですから、説教者は、自分が実行できる事だけを説教するというようなことでは、神の言葉を正しく十分に伝えるということにはなりません。たとえ説教者自らは実践において乏しく、弱いと自覚していてもそれが聖書の教えですから、語らなければなりません。それは、説教者が神の言葉を正しく伝え、宣言するように召されているからです。ですから大切なのは、説教者自らが神の言葉を宣言するのは、会衆だけでなく自分自身にも語っているという自覚を持つ事なのです。そして事実、説教者もその説教を聴くのです。しかも説教者は、説教準備の段階から御言葉に聞くという姿勢を持って取り組むべきなのです。神のお言葉は、人にだけ向かって語られるものではなく、一人一人が自分に語られた神からのメッセージとして受け止められるべきものだからです。このように説教者は自ら説教し、自ら聞く態度が常に養われていなければ、説教を聴く機会はほとんどないでしょうし、また説教者も会衆も神に養われて成長し続けるということにはなりません。それどころか、自ら宣べ伝えておきながら滅びる事にさえなりかねないのです。会衆も説教者は、あの説教を自分にも語っていると理解して聞くべきです。説教者自身が、でもできないくせに人に説教しても何の効果も力もないとの批評家的聴衆は、その人にとって毒となるばかりであって決して益とはなりません。

先に述べた事は、説教者の自らの説教に対する思いですが、教会における合同の礼拝が礼拝となるのには説教者だけ存在すればよいということはありません。そこには、説教者自らも聴衆として、そこに存在する会衆がなければなりません。そのために合同の礼拝においては、説教という礼拝行為においても、会衆の説教に対する姿勢が同時に大切な礼拝構成要素となります。そこで「会衆の説教」という礼拝要素における姿勢について、次に順序に従って学んでまいります。

- 1、説教と教会の祈り
- 2、説教と礼拝出席
- 3、説教者とよき聴衆の関係
- 4、説教と聖書で確かめる聴衆
- 5、説教を記憶にとどめる会衆
- 6、説教と実践する会衆

#### b. 説教と会衆の姿勢

##### 1、説教と教会の祈り

説教者を励ますのは、良い説教の聞き手です。良い聞き手とは、まず説教者と毎回の説教のために祈る信仰者のことです。説教者が正しく、大胆に、確信を持って神のことばを伝えることができる力と霊性は、神のことばを自分に語られたメッセージとして謙遜に聞き分けることのできる聴衆の祈りによります。このような祈りに取り囲まれて説教壇に立つことができる説教者はとても幸いです。

反対に、このような祈りを欠いた冷淡な批評のための批評は、説教を主の御心に適った説教をするための力とならず、説教者を萎縮させてだめにしてしまいます。又、説教を自分に語られたものとして自分の魂に聞かせようとしないで、いつも他の人に聞かせることばかりを考えている聴衆は、説教者を黙らせてしまうだけでなく、聴衆自身が祝福を失ってしまいます。自分の魂を養う糧として、神のことばに期待のない聴衆は、神に期待しない人であり説教者を潰してしまいます。

「また、私が口を開くとき、語るべきことばが与えられ、福音の奥義を大胆に知らせることができるよう私のためにも祈ってください。」  
エペソ人への手紙六章十九節

## 2、説教と礼拝出席

教会で説教者のことばが生きて働くためには、どんなにつたない説教者のことばをも神のことばとして、受け止めてくれる聞き手とその信仰が必要です。このような聞き従う姿勢をもつ聴衆のいない処では、どんな説教者も成長しません。ですから、礼拝に遅れずに出席し、共に神を礼拝する神の体としての一致が必要です。

ですから礼拝の説教者には、共に神のことばによって招かれ、祈りと讃美、聖書朗読、献金等の一つ一つの礼拝行為の中で確認しあい、養い育てられた一致をもって礼拝に出席する神の民が必要です。ですから良き説教の聞き手とは、公同の礼拝者なのです。

## 3、説教者とよき聴衆の関係

「こういうわけで、私たちとしてもまた、絶えず神に感謝しています。あなたがたは、私たちから神の使信のことばを受けたとき、それを人間のことばとしてではなく、事実どおりに神のことばとして受け入れてくれたからです。この神のことばは、信じているあなたがたのうちに働いているのです。」  
第一テサロニケ二章十三節

説教者と会衆双方の信頼関係のよい事が、礼拝を神への真の礼拝とさせるものです。大切な欠かせない関係ですが、これが二つの「なれ＝慣れと馴れ」となった時その礼拝は、惰性とマンネリ化したものとしてしまいます。ですからこの二つの「なれ」を十分に警戒しなければなりません。「慣れ」とは、習慣化のことで、習慣にはよい習慣もあります。それが伝統というものになっていつまでも語り伝えられ、その礼拝を一定にして落ち着きのあるものとし、しかし、神の言葉を聞くことに習慣化しますと恵みに慣れてしまい、感動を失い、御言葉に立つ事、御言葉を求める事、御言葉に期待する事がなくなってしまいます。その結果聖書を読まないクリスチャン、聖書よりも新聞や雑誌、漫画等に費やす時間を持つ事はできて聖書を読む時間を取らずに平然としています。そのようにして、聖書を後回しにし、神を後回しにしてゆくのです。その結果、聖書知らずのクリスチャン生活となってしまうのです。

もう一つの「馴れ」があります。これは、説教者と聴衆が親密になり、御言葉が神の言葉として聞かれなくなってしまいう事です。説教者と会衆が親しくなることは、先に述べたことからよい事ですが、個人的な関係において馴れてしまうとその説教もその親しさの延長で聞いてしまい、真剣に説教を自分に語られた神の言葉として聞けなくなってしまいう事です。それは、ある時には説教を無批判に受け入れてしまうことであつたり、反対に自分にあてつけをしていると受け留めてしまうようになってしまいう危険性です。この《馴れ》は、説教者が会衆を良く知っているために、大胆に神の言葉を語れなくなってしまいう危険性をも含んでいるのです。

説教者と会衆の関係が親密になるだけでなく、この二つの「なれ(慣れと馴れ)」に陥る危険があります。ですから私たちが、礼拝を崩壊させてしまわないため、この点で互いに注意深く祈る者となりましょう。

## 4、説教を聖書で確認する聴衆

説教が神からの言葉、神の言葉としての栄光を表すのは、聖書に奉仕する限りにおいてです。つまり聖書が語る範囲を超えない、新たな内容を聖書と同等に置かないという事です。説教は、どのような形式であろうと聖書に拘束され、また聖書で確かめられなければなりません。そのように説教は、徹底的に御言葉への奉仕であり、神の言葉の告知です。

説教は、説教者の見解や意見を述べる場ではありません。説教は、神への奉仕ですから、神への献げ物でもあります。説教は、会衆に語りかけるという形を取っております（宣言であり預言です）が、実はその行為もまた神に向かって献げられている（告白されている）と理解しましょう。告白ですから会衆は、決して他人事ではなく、自分たちの神に向かつての自分の生き方としての告白でもあるということです。ですから会衆は、語られる説教にアーメンを共に唱える内容かどうかを吟味し、各自の責任を神の御前で問わなければなりません。

### 5、説教を記憶にとどめる会衆

これは、良い聞き手となるという事です。良い聞き手とは、礼拝を簡単に休まないで、説教を聞き逃さない会衆の事です。勿論説教は、一回で一つの完結性を持っておりますが、休みますと聖書全体と神の御心のあらゆる角度からの理解が困難になります。

ですから、どうしても礼拝を休まなければならない場合、説教テープがありますので、それらを用いて補足しておく事をお勧めします。但し、テープ聴講は、礼拝にとって代わるものとは決してならないことを承知しておきましょう。礼拝とそこでなされる説教は、学校や講習会の講義ではないのです。礼拝は、全身全霊で一つとされたキリストの体として、神に向かつて献げるものです。更に礼拝を休むということは、キリストの肢体として共に一つのパン（御言葉）を食べ、共に養われ、共に成長させられる機会を失う事なのです。それ故、礼拝欠席は、教会がキリストの体としての統一性を養うという要素を弱める結果となります。私達は、御言葉によって養われるというキリスト者の特権を放棄しないようにしたいものです。

### 6、説教と実践する会衆

（「また、みことばを実行する人になりなさい。自分を欺いて、ただ聞くだけの者であってははいけません。」（ヤコブ1章22節）

今日教会は、みことばと、みことばを聞くことの飢饉にさらされています。主を証しする為に聖書のみことばではなく、様々なイベントが中心となってしまっています。それは、主を証しする聖書の御言葉の権威が否定され、神の言葉が人の言葉や楽しさにすりかえられているからに他なりません。またしばしば、私たちは、しづかにしわってみことばに聞き入ることを忘れ、ただあくせくと動き回る事のみ心と時間を使っていないでしょうか。

更に、みことばを聞くことの重要さに気付いて聞き入ったとしても、聞くことだけが目的となって、聞くだけで終わっていないでしょうか。ですから、聖書の言葉も説教も正しく聞かれなければなりません。そうでなければ何の益にもなりません。かえって災いにさえなります。みことばを聞いても実行する者とならなければ災いです。それは、何よりも自分を欺いている事だからです。つまり聖書と説教が、神の御前に自分のあり方を点検する為に用いられ、神をよりよく知って、信頼が増し加わり、実践させる為に聞かれ、読まれるのでなければ、災いなのです。

また御言葉と説教が、自分の霊性やクリスチャン生活の態度を吟味する為にではなく、他のクリスチャンの信仰生活を裁いたり非難するための材料として聞かれ、読まれるならば、教会はサタンの誘惑に翻弄され、崩壊させられるでしょう。更に自分の救いの喜びと確信を奪われてしまい、救われる以前よりも悲惨な状態に陥ることになるでしょう。

私達は、神によって新しく生まれ変わらせられたのです。ですから、それに相応しい生き方があるのです。私達は、救われただけでなく、神に従う事のできる力と賜物が与えられているのです。

## 「説教と会衆」

説教は、何が大切かというところ、ある人は、説教スタイルをいう人がおりますが、それは全く誤りです。私は、「とても恵まれた集会でした。」という報告を受けた時、「どのような恵みを受け、どのように神様の導きを頂きましたか。」と聞きます。すると「とにかくすごかったです。あの先生の説教はとても迫力があって恵まれました。」という返事が返ってきます（勿論聞き方にもよりますが）。それも説教の要素の一つかもしれません。しかし最も中心になるべき恵みは、御言葉を通して教えられる神様のお取り扱いではないでしょうか。またある人は、巧みな会話とユーモアで聴衆を引きつけて、飽きさせない、笑いと涙で魅了することを言う人がおります。しかし神様がそのお言葉で何をいわれているのか何も分からなかった、というのであれば、それはまた説教とは異なったものとなってしまっております。また、説教というよりも人性相談会やカウンセリング講習会、体験談や自慢大会といったほうが良いものもあります。これもまた説教とは違った次元のものといわなければなりません。

私は説教を準備している時にいくつかの事を注意しております。

- 1、 この説教は、聖書のテキストに拘束されているか。聖書の全体から逸脱していないか、という点です。本来神の言葉は聖書です。聖書以外に私たちが神の御心を求める時、聞くべき価値のある言葉はありません。聖書だけが私たちの信仰生活と全ての領域における基準です。ですから、説教は、この聖書の語ることを正しく聞き取る為に解釈し、現代に生きる私たちに語られる神の御旨を伝えることです。ですから、会衆も説教に対して、期待するところを間違えないようにして欲しいのです。「面白く、ためになるお話し」を聞くために集っているわけではないという事です。ともに聖書を通して神に聞き、従うための説教なのです。
- 2、 聖書を解釈する時に聖書の言葉さえ使っていればよいというものではありません。説教者は、聖書の言葉に縛られるといったとき、統一された正しい福音主義神学がなければなりません。説教にはいつも教理や神学があるからです。ですから、説教を聞くときに感覚的にまた雰囲気や霊的であったかどうかというだけで終わらないで、説教の主張とその中に通っている教理を受け取っていただきたいと思っております。

## 礼拝構成要素 頌栄

頌栄は、礼拝の頂点であると言われるくらいに大切な礼拝の構成要素です。しかし礼拝者は、頌栄を習慣的、機械的、形式的に歌ってしまう危険があると指摘されています。耳を傾けなければなりません。この頌栄は、神の臨在を願い、求め、先ほど献げた礼拝が台無しになってしまう危険の大きい瞬間なのです。この時間は、私たちが礼拝において求めてきた神の臨在とその威厳をほめたたえるという最高にすばらしい時なのです。その祝福と喜びを空しくしてしまう危険性をもっているのが、この頌栄の時間なのです。

つまりこの「頌栄」は、礼拝がとても素晴らしいものとして献げられたかどうかの試金石ともなるものです。ですから全ての礼拝者は、この「頌栄」を礼拝終了の合図のような気分で歌うことは、礼拝に全く相応しくありません。礼拝者は、三位一体の神の栄光を心から讃美して礼拝の終わりを迎えましょう。私たちは、この「頌栄」において、御臨在された神を最も身近に覚えるのです。野田秀師は「それは天国の縮図で」(「新版 礼拝のこころえ」)と表現しております。

さて、まず「頌栄」という言葉から理解しておきましょう。

日本語に「頌栄」と訳された語は、ギリシヤ語の「栄光」と「ことば」が合成してできたことばです。これは、三位一体の神に栄光を帰し、その御名をほめたたえるために作られた賛美歌です。「頌栄」には、グロリア・イン・エクセルシス(大頌栄)とグロリア・パトリ(小頌栄)とがあります。大頌栄は、ローマ・カトリック教会でミサの一部として用いられています。今日のプロテスタント教会が用いている頌栄は、小頌栄を指します。

頌栄は、三位一体の神をほめたたえている讃美ですが、それはマタイ 28 章 19 節、コリント 13 章 13 節に由来しております。そのような歌はシリア地方に始まり、後にはキリストの神性を否定するアリウス派に挑戦する目的でも用いられたといわれております。

東方教会では、2 つまたは、それ以上からなる詩篇を誦するたびに歌われ、西方教会では、詩篇の歌誦が一篇終るごとに歌われました。この習慣がプロテスタント教会にも受け継がれ、詩篇の交読の後だけでなく、次第に礼拝の終りに歌われるようにもなりました。

## 礼拝構成要素 祝祷

この祝祷は、ヘブル語ベラーカー（祝福）あるいはアシェール（繁栄・幸運）、ギリシヤ語ユーロギア（祝福）あるいはマカリオス（幸福）からきた礼拝述語です。元来は、個人が誰かを祝福する場合にも用いられたことばです（創9：26、27：27）。今日では、公的な礼拝の最後に教職者によって行われる礼拝要素の一つとなっています。モーセは、約束の地を前にしてイスラエルを祝福しました（申28：1～14）。また神によって任命された大祭司あるいは祭司によって行われる祝祷が、旧約時代の典型的な姿でした。その最も代表的な祝祷は、民数記6章24～26節に記されています。

旧約時代の礼拝行為の多くを受け継いだ新約のキリスト教会も、主によって任命された使徒たちの書簡の終り部分を祝祷と考え、任職された司式者によって、祝祷が礼拝の最後に会衆に向かってなされています。会衆は、祝福のうちに教会から送り出され、また牧師も主の御手にゆだねます。そして「主よお守りください、祝してください」祈り、願いをこめて会衆をこの世に遣わすのです。従って祝祷は、今献げた礼拝の感謝の祈りであると同時にそれは、神の民を世に遣わす派遣を意味していました。ですから、送り出される時に神の祝福の約束が宣言され、祈られて送り出されるのです。ですから、この祝祷は、「祝福と派遣」の宣言なのです。これは、復活の主イエスが昇天される前に、弟子たちに語られたマタイによる福音書28章19～20節のお言葉の中にあります。

このように祝祷は、礼拝を献げる神の民にとって、共にみことばを聞く・共に祈る・共に賛美する・その恵みをともしるといふ礼拝の喜びと共に、こんな私たちをも、神が祝福してくださり、主の証し人として派遣してくださるといふ喜びの時なのです。ある人々は、この祝福の言葉を受ける為に礼拝に集うとさえ言います。

その最も代表的な祝祷文は、コリント13章13節です。他にもヘブル13章20～21節、ローマ15章13節、ユダ24～25節が挙げられます。また、「平安がありますように」という短い文もあります（ペテロ5章14節、ヨハネ15節）。新約聖書における使徒的祝祷は、公同礼拝ばかりでなく、キリスト教的な礼拝の要素を持つ結婚式や葬儀においても行われます。葬儀においては「祝」という語を避けて、「終祷」と呼ぶ事もありますが、これは礼拝者に平安を約束するものに変りありません。